様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 ２６ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００６５８

研究課題名（和文）言語変化と言語発達の比較に基づく普遍文法とミクロパラメータの解明

研究課題名（英文）An exploration into universal grammar and micro-parameters on the basis of comparison between language change and language acquisition processes

研究代表者
小川　芳樹（Ogawa, Yoshiki）

東北大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：２０３２２９７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：4年間で、共著の本を１冊、共編著の本を２冊、開拓社から出版し、査読付き国際誌（Zeitschrift fur Wortbildung, Lingua, Studia Linguistica, Interdisciplinary Information Sciences)に計4本の英文論文、和書に計7本の和文論文を掲載したほか、国際学会で3回（SLE#53, ＃55, Workshop on Phex #12)、国内学会・研究会で計13回口頭発表した。
また、「言語変化・変異研究ユニット」およびAA研共同利用・共同研究課題の代表者として、18回の研究会、ワークショップ、または講演会を主催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
業績の学術的意義については、言語の変化のメカニズムや過程を正確かつ詳細に観察し、現象間の関連性を解明することは、言語の共時的変異の様相や、言語獲得のメカニズムを解明する上で不可欠である。
研究実績のうち論文２編はIFの高い国際ジャーナルに掲載されたことが、学術的意義の評価の客観的指標の１つとなる。
共同研究の代表者としての活動の社会的意義については、東京外国語大学AA研の共同研究課題に採択されたことや、そこで筆者が主催した公開での研究会や講演会への参加登録者が毎回50名から90名超を超えたことから、広く認知され高い関心を集めた社会的活動であったと言える。

研究成果の概要（英文）：In the four years, I published one co-authored book and two co-edited books from Kaitakusha, published four English-written articles from international journals (Zeitschrift fur Wortbildung, Lingua, Studia Linguistica, Interdisciplinary Information Sciences) and seven domestic articles from Japanese books. Also, I made three presentations at international conferences (SLE#53, ＃55, Workshop on Phex #12) and thirteen presentations at domestic conferences/workshops. I also held eighteen workshops or invited lectures as the leader of the "Language Change and Language Variation Research Unit" at Graduate School of Information Sciences, Tohoku University, and/or as the host of the ILCAA Joint Research Project titled “Exploration into the Mechanism of Language Change and Variation through the Dialogue between Theoretical Linguistics, Linguistic Typology, and Quantitative Linguistics.”

研究分野：史的統語論、比較統語論、形態統語論

キーワード：文法化　ミクロパラメータ統語論　複合動詞・形容詞　形式名詞構文　主格属格交替　与格主格交替　漢字構文　コーパス準拠型研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

生成文法統語論は、1980 年代は、「原理とパラメータの理論」のもとで、言語普遍性と言語の変化･変異の両面を説明することに同程度の力点が置かれていた。1990 年代になって、ノーム・チョムスキーは、極小主義プログラムを導入して以降、語順の問題や言語の変化・変異の問題を外在化の問題とし、言語普遍性のみを最小の道具立てのもとで説明することに目標を定めた。しかし、同時期に生成文法は幾つかの分派に分かれ、ミクロパラメータ統語論やカートグラフィーやミクロキュー理論や分散形態論など、言語の変異や変化の側面を生成統語論の枠組みで説明しようとする文法理論は、2020 年以降も一定の勢力を維持している。

1990 年以降、認知言語学のもとでは、言語変化のうち文法化の側面に見られる意味的な法則性を明らかにする試みが盛んに行われるようになり、構文文法のもとでは、形式と意味のペアとしての「構文」とその拡張の仕組みを言語ごとに記述し説明しようとする試みが続いており、これを通時的な構文の発達過程の説明にも拡張して適用する「通時的構文文法」も提案されている。また、認知言語学の下位分野である「用法基盤言語学」では、頻度に基づいて言語獲得と言語変化のメカニズムを解明しようとする努力が続いている。

２．研究の目的

このような研究背景を踏まえて、筆者は、生成統語論の中でも特にミクロパラメータ統語論を採用し、その考え方と通時的構文文法や用法基盤言語学の考え方を融合することで、50～100 年程度の比較的短い年月で、漸進的に、しかし確実に進行する統語変化と、それを伴う意味変化（特に、文法化と構文化）のメカニズムの解明を行うこと、および、基本的には短期間で変化はしないはずだが言語間で顕著な変異が見られる統語現象（特に、機能語の形式と意味の対応関係のずれ、ねじれ）の背後にあると考えられるミクロパラメータの性質の解明を目的として、研究している。

その目的に沿って、この 4 年間は特に、(i) 頻度と言語変化の関係性の解明、(ii) 文法化・構文化により形式と意味の対応関係のずれが生じる現象は、どのような機能範疇のどのようなミクロパラメータの値の変化に起因するのか、(iii) そのように微妙に変化を続けるミクロパラメータの値を、言語獲得中の幼児はどのようにして獲得しつつ、母語の変化の担い手となるのか、(iv) 幼児は言語獲得の過程で、さほど高頻度ではないにせよ大人の発話には含まれない独特の構文や語彙を生成することがあるが、その生成された独特な言語表現も、普遍文法が許す構文の変異の範囲内に収まっているのはなぜか、といった問題に自分なりの解答を与えることを目指してきた。

３．研究の方法

自然言語の普遍性を解明する上でも、通時的変化や、その帰結としての変異形の出現を説明する上でも、まずは、信頼できる言語事実を一定の量収集することが不可欠である。

従来、生成文法理論のもとでは、母語話者一人の内省判断に基づいて言語理論が構築されることが多く、100 人いれば 100 通りの異なる I 言語（内的言語）があってもよいとする立場が堅持されてきた（Chomsky (1986), Lightfoot (1989), Kayne (2000)）。しかし、そのように百人百様の I 言語に関する内省データのみが収集されても、そこから、I 言語についての百通りの仮説が提案されるだけでは、どの理論もそれを構築した母語話者（＝理論言語学者）の内省判断結果とは矛盾がないので、複数の理論間の優劣をつけることもできないし、なぜ個人差が生じたり言語変化が起きたりするのかという根本問題の説明には役立たないし、そのように変化する側面と変化しない側面を分ける要因は何なのかの説明にもつながらない。

また、言語変化のメカニズムや、常に変化している言語の獲得の問題を論じる上では、そもそも、現代は廃れてしまった古い時代の言語については、現代に母語話者がいないので内省が働かない。したがって、言語変化の道筋やそれが起きる理由についての仮説は、現在まで残存している限られた数の古典作品などの文献を読み解ける専門家の知見に依存してそれを構築するしかないという問題が内在していた。

しかし、最近 15 年ほどは、歴史コーパスを活用して、時代ごとに異なる構文の頻度の増減と変化の過程を明らかにすることが可能になっており、また、変異どうしの相関や、現在進行中の変化に伴う容認性の世代間差などを追加の証拠として分析に加えることにより、ミクロパラメータの中身を、従来よりも精度の高い形で推論し反証することが可能となってきている。

また、筆者は、自身の長女と次女の発話を、それぞれ、6 歳 2 ヶ月、7 歳 3 ヶ月まで記録

した、22000～30000 単位のデータベースを有しており、長女についてはその全部、次女についても 4 歳 2 ヶ月までの発話がすでに CHILDES から公開されているが、未公開のデータについても Excel ファイルで所有している。これらのデータや、CHILDES に含まれる他の幼児の発話データを使って、言語発達のそれぞれの段階で幼児はどのような構文を獲得するのか、また、どの月齢でどのような言い間違いをしやすいのかといった事実を解明することも可能となっている。

このように、コーパスデータが質の面でも量の面でも充実してきている背景を踏まえて、筆者は、言語変化のメカニズムについての理論的な仮説を立て、その仮説を、コーパスデータから得られる言語変化や言語獲得の事実によって検証するという研究手法を、最近 4 年間は一貫して行ってきている。

また、共同研究者である実験心理学者 2 名の協力も得て、ウェブを介した大規模な容認性判断調査を行い、その結果を統計処理することを踏まえて、言語変化の仮説の妥当性を検証するという試みも実践してきている。

４．研究成果

上記の背景と方法論を踏まえて、筆者は、この 4 年間で、単著または共著の論文の中で、主に以下の現象についての通時的変化、および幼児の言語発達についてのさまざまな事実を明らかにし、それを、生成文法のミクロパラメータ統語論（Kayne (2000, et seq)、カートグラフィ（Rizz 1997, 2004; Cinque 1999, 2006)、上方再分析による文法化分析 (Roberts and Roussou 1999, 2003; Roberts 2012)、筆者自身が象徴している「統語的構文化」の枠組み (Ogawa (2014))などを用いて説明してきた。

１）文法化・構文化（複合以外）について
１－１）日本語の V1-Neg-V2 構文の文法化（例：住まなくなる）と語彙化（いなくなる）について（単著；Lingua 280 に収録）
１－２）日本語の数詞「ひとつ」の極小化子から焦点化子への文法化（例：風邪ひとつひかない、何一つ買わない）について(単著；Studia Linguistica 77(2)に収録)
１－３）日本語の「必要だ」という述部の文法化について(単著；開拓社論文集に収録)
１－４）日本語の形式名詞「こと」「ところ」「はず」の文法化・構文化について(単著；AA 研口頭発表)
１－５）日本語の形式名詞の文法化と連濁について(単著; Phex 7 に収録)
１－６）中国語と英語の GO/COME を意味する動詞の文法化の程度の差について（共著；Interdisciplinary Information Sciences に収録)

２）複合動詞・複合形容詞の文法化と語彙化と構文化について
２－１）日本語や中国語や英語など多くの言語で、反意語である動詞や形容詞どうしを複合したり等位接続すると名詞化する事実（例：昇り下りをする、良い悪いの区別、良いと悪いとの区別、every now and then, every here and there など）（共著；*Zeitschrift für Wortbildung / Journal of Word Formation* (ZWJW) 4(32)に収録)
２－２）名詞＋形容詞「ない」の結合による複合形容詞（例：だらし（が）ない、さりげ（*が）ない、など）の語彙化の起こり方について（SLE 55 口頭発表）
２－３）中国語の他動詞が中漢語以降 2 音節化したことによる複合動詞化と、語彙動詞から軽動詞への文法化について（共著；AA 研口頭発表）
２－４）中国語の「喝醉（drink-drunk)」型複合動詞でのみ可能な逆行束縛現象について（共著；AA 研口頭発表、日本言語学会ポスター発表、SLE 57 ポスター発表予定）

３）日本語の主格属格交替現象について
３－１）属格主語文の構造的縮小と語彙化に伴う、補文標識、過去時制、主語と述語の間に介在する副詞、動作動詞・変化動詞との共起可能性の低下と頻度減少、および、それに伴う容認性の低下（若い世代ほど低い容認性を示す）について（単著・共著；開拓社論文集および開拓社から出版の共著に収録、共著；Palgrave MacMillan 論文集に収録予定）
３－２）肥筑方言における主節内での主格属格交替現象に見られる、標準語の連体修飾節内での主格属格交替現象とは異なる性質の変化について（Palgrave MacMillan 論文集に収録予定）

４）日本語の与格主語構文について
存在構文から所有構文が発達し、所有構文の変種としての「要る／必要だ／できる／見える」のような個体レベル述語文にも与格主語が可能になる形で通時的に構文化してきた事実を日本語歴史コーパスから明らかにし、この事実について、与格主語が、当初は External Locative Modifier (Maienborn(2001))であったのが、Stage-setting Locative Modifier としての用法を通時的に発達させてきたこと、また、現代日本語の与格主語構文は個体レベル述語文であることを主張（共著；AA 研口頭発表、Palgrave MacMillan 論文集に収録予定）

５）語種制約とその緩和
日本語に 5 世紀以降 4 段階に分けて借用された漢字構文の多くは現代日本語でも元の漢語の特徴を保持していて、語順や自他交替や連濁などの日本語に特有の文法的特徴を示さない（語種制約を示す）が、一部は語種制約が緩和され、日本語の文法に従った振る舞いをするように変化した事実について、漢語から日本語への「借用（borrowing）は、Thomason and Kaufman (1988)による「借用」の 5 段階の中で軽い方から 2 段階めの「わずかな構造的借用を含む、わずかに強い接触(Slightly more intense contact)」の段階にあると主張（共著；AA 研口頭発表）

６）母語獲得について
６－１）日本語の右方周縁部の補文標識「か」と「と」の語順を幼児は決して間違って獲得することがない事実を CHILDES の調査をもとに確認し、これを UG の反映であると主張（共著；AA 研口頭発表、開拓社論文集に収録）
６－２）日本語の形式名詞「こと」「ところ」「はず」の文法化・構文化の過程と、文法化したこれらの形式名詞の各用法を日本語獲得中の幼児が獲得する順序がほぼ完全に符合する事実について(単著；AA 研口頭発表)
６－３）筆者の長女と次女の発話を、それぞれ、6 歳 2 ヶ月までの 22000 単位、7 歳 3 ヶ月までの 30000 単位ほど記録した、長女についてはその全部、次女についてはその 4 歳 2 ヶ月までの発話を、宮田スザンヌ氏の協力を得て、CHILDES から公開済み。次女の 4 歳 3 ヶ月から 7 歳 3 ヶ月までの発話も、データは提供済みであり、いずれ公開予定。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Yoshiki Ogawa	４．巻 77(2)
２．論文標題 Grammaticalization from Minimizer to Focus Marker as Upward Reanalysis along the Nominal Spine	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Studia Linguistica	６．最初と最後の頁 258-306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/stul.12208	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yoshiki Ogawa	４．巻 280
２．論文標題 The V-Neg-V Complex Predicates, Two Types of Negation, and Grammaticalization in Japanese	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Lingua	６．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.lingua.2022.103399	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yoshiki Ogawa	４．巻 7
２．論文標題 Grammaticalization and Sequential Voicing in Japanese	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Phonological Externalization	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小川芳樹，中山俊秀	４．巻 なし
２．論文標題 変化・変異・進化の事実に向き合う種々の言語理論　― 必要なのは対立か，　対話か，連携か ―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・ 変異と言語理論3（小川芳樹・中山俊秀編）	６．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Yi Linya，小川芳樹	4．巻 なし
2．論文標題 直示的移動動詞の文法的構文化－日本語と中国語の比較の視点から－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・ 変異と言語理論3（小川芳樹・中山俊秀編）	6．最初と最後の頁 143-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小川芳樹	4．巻 なし
2．論文標題 形式名詞の文法化と連濁― 統語部門での編入による語形成の視点から ―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・ 変異と言語理論3（小川芳樹・中山俊秀編）	6．最初と最後の頁 205-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小川芳樹，新国佳祐，和田裕一	4．巻 なし
2．論文標題 語彙化に関する主節・関係節の非対称性と世代間差の考察－「[名詞]（が） ない」を例に－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・ 変異と言語理論3（小川芳樹・中山俊秀編）	6．最初と最後の頁 223-241
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉崎鉱司，小川芳樹	4．巻 なし
2．論文標題 日本語における右方周縁部の獲得:自然発話分析に基づく予備的研究	5．発行年 2022年
3．雑誌名 コーパスからわかる言語変化・ 変異と言語理論3（小川芳樹・中山俊秀編）	6．最初と最後の頁 259-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小川芳樹	4．巻 98
2．論文標題 書評：岸本秀樹編『レキシコンの現代理論とその応用』くろしお出版，2019 年，v + 197pp.	5．発行年 2021年
3．雑誌名 英文学研究	6．最初と最後の頁 185-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小川芳樹	4．巻 なし
2．論文標題 「必要」の文法化と範疇的多義性について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ことばの様相：現在と未来をつなぐ（島越郎ほか編）	6．最初と最後の頁 136-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni, Yuichi Wada	4．巻 4(2)
2．論文標題 Empty nominalization over antonymous juxtaposition/coordination and the emergence of a new syntactic construction	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Zeitschrift fur Wortbildung / Journal of Word Formation	6．最初と最後の頁 13-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/zwjw. 2020.02.02	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小川芳樹，新国佳祐，和田裕一	4．巻 なし
2．論文標題 「Xは高い」と「Xは高さがある」の比較から見た尺度構文の統語構造	5．発行年 2020年
3．雑誌名 名詞をめぐる諸問題―語形成・意味・ 構文―（由本陽子・岸本秀樹編）	6．最初と最後の頁 150-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoshiki Ogawa and Miyata Susanne	4．巻 なし
2．論文標題 Ogawa Corpus	5．発行年 2020年
3．雑誌名 CHILDES: Child Language Data Exchange System（データベース）	6．最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21415/T5H314	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Linya Yi and Yoshiki Ogawa	4．巻 30(1)
2．論文標題 Comparison of the Verb of Motion GO in English and Chinese in Terms of Grammaticalization	5．発行年 2024年
3．雑誌名 Interdisciplinary Information Sciences	6．最初と最後の頁 13-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4036/iis.2023.R.04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni and Yuichi Wada
2．発表標題 Lexicalization as an Ongoing Change and the Cline of Lexicality: A View from the Complex Negative Adjectives in Japanese
3．学会等名 55th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE 55)（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 小川芳樹
2．発表標題 V-Neg-V複雑述部の語彙的構文化と文法的構文化について
3．学会等名 言語 変化・変異研究ユニット第9回ワークショップ／AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第3回研究会（共催）
4．発表年 2022年

１．発表者名 小川芳樹，縄田裕幸
２．発表標題 個体レベル所有構文としての与格主語構文の発達とFinP
３．学会等名 言語 変化・変異研究ユニット第10回ワークショップ／AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第６回研究会（共催）
４．発表年 2023年

１．発表者名 杉崎鉱司，小川芳樹
２．発表標題 日本語における右方周縁部の獲得:自然発話分析に基づく予備的研究
３．学会等名 言語 変化・変異研究ユニット第10回ワークショップ／AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第６回研究会（共催）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小川芳樹
２．発表標題 連濁の通時的変化の事実から見た形式名詞句の統語構造
３．学会等名 言語変化・変異研 究ユニット第７回ワークショップ／AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」第3回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoshiki Ogawa
２．発表標題 Grammaticalization and Sequential Voicing in Japanese
３．学会等名 12th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure (Phex 12),（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni, and Yuichi Wada
２．発表標題 Lexicalization as an Ongoing Change and the Cline of Lexicality: A View from the Complex Negative Adjectives in Japanese
３．学会等名 55th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE 55)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小川芳樹
２．発表標題 「必要」の文法化と範疇的多義性、および、所有動詞の類型論について
３．学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」第2回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小川芳樹
２．発表標題 (史的)統語論と構文文法から見た複合語の分析の変遷－「語性(Wordhood)」 の定義と語彙的緊密性をめぐって－
３．学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」第4回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoshiki Ogawa
２．発表標題 Prohibition against Category Resumption by Cyclic (Zero) Derivation and the Phase Impenetrability Condition
３．学会等名 53rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE 53)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 小川芳樹・新国佳祐・和田裕一
２．発表標題 「名詞＋(が+)(XP+)(で)ある」型複雑述部における主格助詞の随意性について
３．学会等名 日本言語学会第160回全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 小川芳樹
２．発表標題 極小化子「極小化子NPIの文法化と上方再分析
３．学会等名 言語変化・変異研究ユニット第6回ワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 岳昱澎（Yue Yupeng）・小川芳樹
２．発表標題 構造的借用と語種制約、およびその緩和と構文化についての予備的研究：自他交替と接尾辞「さ」を中心に
３．学会等名 AA 研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2023年度第1回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 岳昱澎（Yue Yupeng）・小川芳樹
２．発表標題 中国語の「喝醉」型複合動詞の構造的多義性と逆行束縛について
３．学会等名 言語変化・変異研究ユニット第11回ワークショ ップ
４．発表年 2023年

１．発表者名 岳昱澎（Yue Yupeng）・小川芳樹
２．発表標題 中国語の「喝醉」型複合動詞の構造的多義性と逆行束縛
３．学会等名 日本言語学会第167回全国大会ポスター発表
４．発表年 2023年

１．発表者名 小川芳樹
２．発表標題 文法化の順序と幼児の獲得の順序に見られる符合－ 形式名詞「こと」「ところ」「はず」についての考察－
３．学会等名 言語変化・変異研究ユニット第 12回ワークショップ
４．発表年 2024年

１．発表者名 岳昱澎（Yue Yupeng）・小川芳樹
２．発表標題 中国語の形容詞述語文における統語的な制約について
３．学会等名 日本言語学会第168回全国大会ポスター発表（予定）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Yue Yupeng an Yoshiki Ogawa
２．発表標題 Duality in Word Order in Chinese: An Approach from Microparametric Syntax on Light Verb
３．学会等名 57th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE 57)（予定）（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計5件

1．著者名 小川 芳樹，中山 俊秀（共編）	4．発行年 2022年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 464
3．書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論３	

1．著者名 島越郎、富澤直人、小川芳樹、土橋善仁、佐藤陽介、ルプシャ・コルネリア（共編）	4．発行年 2022年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 416
3．書名 ことばの様相：現在と未来をつなぐ	

1．著者名 小川芳樹・石崎保明・青木博史（共著）	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 294
3．書名 文法化・語彙化・構文化	

1．著者名 由本陽子・岸本秀樹（共編）	4．発行年 2020年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 304
3．書名 名詞をめぐる諸問題―語形成・意味・ 構文―（第８章（pp.150-173）を担当）	

１．著者名 Yoshiki Ogawa and Miyata Susanne	４．発行年 2020年
２．出版社 TalkBank	５．総ページ数 0
３．書名 Ogawa Corpus (Mari)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

言語変化・変異研究ユニット
http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/home.html
理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求
http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp271
鳥類コミュニケーションシグナルの解析から理解する言語の生成と認知の脳内機構
https://w3.tohoku.ac.jp/frid/project/page-850/
ResearchGate
https://www.researchgate.net/profile/Yoshiki-Ogawa
Google Scholar
https://scholar.google.com/citations?view_op=list_works&hl=ja&user=4cEdQG8AAAAJ
CHILDES (Ogawa Corpus)
https://childes.talkbank.org/browser/index.php?url=Japanese/Ogawa/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	和田　裕一 (Wada Yuichi) (80312635)	東北大学・大学院情報科学研究科・准教授 (11301)	日本語の史的統語論に関する共同研究 統計分析
研究協力者	新国　佳祐 (Niikuni Keiyu) (60770500)	新潟青陵大学・准教授 (33109)	日本語の史的統語論に関する共同研究 実験プラン構築、統計分析
研究協力者	中山　俊秀 (Nakayama Toshihide) (70334448)	東京外国後大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603)	AA研共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」（代表：小川芳樹）の副代表

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	宮田　Ｓｕｓａｎｎｅ (Miyata Susanne) (40239413)	愛知淑徳大学・教授 (33921)	幼児発話コーパスCHILDESに提供した筆者の長女・次女の発話に形態素タグ付けし公開。CHILDES日本語部門の管理者。
研究協力者	縄田　裕幸 (Nawata Hiroyuki) (00325036)	島根大学・学術研究院教育学系・教授 (15201)	日本語の史的統語論に関する共同研究 古英語から近代英語までのデータ提供
研究協力者	杉崎　鉱司 (Sugisaki Koji) (60362331)	関西学院大学・文学部文学言語学科・教授 (34504)	幼児の言語獲得メカニズムに関する共同研究 母語獲得と生成文法に関する情報提供と意見交換
研究協力者	森山　倭成 (Moriyama Kazushige) (00967755)	鳴門教育大学・講師 (16102)	日本語の史的統語論に関する共同研究 肥筑方言のデータ提供
研究協力者	岳　昱澎 (yue Yupeng) (11301)	東北大学・大学院情報科学研究科・大学院生 (11301)	中国語のデータ提供
研究協力者	屏　林や (Yi Linya) (11301)	東北大学・大学院情報科学研究科・大学院生 (11301)	中国語のデータ提供 「林や」の「や」は「並」から点々を除いた中国語の漢字。
研究協力者	安部　健太郎 (Abe Kantaro) (70462653)	東北大学・大学院生命科学研究科・教授 (11301)	「鳥類コミュニケーションシグナルの解析から理解する言語の生成と認知の脳内機構」の研究代表者（小川は研究分担者）
研究協力者	乾　健太郎 (Inui Kentaro) (60272689)	東北大学・大学院情報科学研究科・教授 (11301)	「鳥類コミュニケーションシグナルの解析から理解する言語の生成と認知の脳内機構」（研究代表者：安部健太郎）の研究分担者，MBZUIAI （UAE)の Visiting Scholar

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大久保　達夫 (Okubo Tatsuo)	北京脳科学研究所・高等研究学者	小川が研究分担者である研究課題「鳥類コミュニケーションシグナルの解析から理解する言語の生成と認知の脳内機構」（研究代表者：安部健太郎）の海外研究機関パートナー

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	北京脳科学研究所			
アラブ首長国連邦	MBZUAI			